松代藩第六代藩主真田幸弘と遊歌―付・翻刻真田宝物館所蔵　幸弘和歌詠草―

平林香織
竹中墨

幸弘の和歌活動

松代藩第六代藩主真田幸弘は、江戸時代以来、菊貫・象麿・白日庵・馬逸等多くの俳号を持つ俳人大名として知られている。郡山藩主柳沢信鴻（のぶとき）（享保九〈一八二四〉―寛政四〈一七九二〉、俳号・米翁、幸弘の叔父）の文芸サロンに出入りし、点取俳諧の指南を受けていたことが、柳沢信鴻『宴遊日記』（一三巻二六冊、信鴻致仕後の安永二年〈一七七三〉～天明五年〈一七八五〉までの日記）の記事からわかる。たくさんの江戸座の俳人とも交流があり、何人かを松代に招いてもいる。七十数名の大名と俳諧を通じた交友関係をもち、大名・旗本・藩士らと巻いた百韻は伝来するものだけで九百巻に及ぶ。俳諧の座の主催者あるいは連衆だっただけではなく、点者として他の大名俳人らが巻いた巻に点数を付けていたこともわかっている。

一方で、幸弘は、俳諧活動だけではなく、和歌活動も行っていた。宝暦三年（一七五三・幸弘一三歳）ごろ賀茂真淵（元禄一〇〈一六九七〉～明和六〈一七六九〉）に和歌の指導を受け、寛政五年（一七九三・幸弘五四歳）には堂上歌人・日野資枝（すけき）（元文二年〈一七三二〉～享和元年〈一八〇一〉）に入門した。

井上敏幸氏は、寛政五年（一七九四）幸弘が堂上歌人・日野資枝に入門を果したのは、「大名家と和歌と政治のつながりを、定信の考証を通して理解する」ようになったからではないかと推論する（「真田幸弘の俳諧―真田幸弘の俳諧資料―」平成十七年度～十九年度科学研究費補助金基盤研究（B）研究成果報告書『近世中・後期松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文及び諸芸に関する研究　論文篇・資料篇　第一部』、平成二〇・三）。

宝物館に伝来する幸弘の和歌資料は、寛政年間に集中しており、井上氏の推論を裏付ける。真田宝物館には幸弘の和歌関係書として、次のものが伝来する。

①幸弘の和歌師匠遊歌の書簡、日野資枝の加点和歌懐紙
②賀集
③算賀集
④詠草
⑤和歌俳諧紀行（画巻『青葉蔭』・紀行文『湘南紀行』）
⑥遺稿和歌集　上下二冊

①は真田家にとって重要なもので、遊歌が堂上の日野家と真田家との仲立ちをしていたことを示す。資枝からの書状は直接幸弘に出されるのではなく、遊歌を介してやりとりしていたことがわかる。資枝が点をいれた懐紙も、資枝からいったん遊歌に届けられ、そのあと遊歌が真田家へ届けたものと思われる。和歌懐紙は寛政五年（一七九三）～八年（一七九六）の間の五枚。幸弘の和歌二、三首に対して、一首ないし二首に資枝の長点がつけられている。「御褒詞あり」と包に書かれているもの

もあり、すべてがまとめて「天真院様御歌／京都日野家ゟ御墨引」と書かれた畳紙に包まれている。

②の賀集の最初のものは、松代の海津城につがいの鶴が飛来したことを瑞祥として編纂された『ともづる』二冊（天明七年〈一七八七〉）である。幸弘の甥である松平定信（宝暦八年〈一七五八〉―文政一二年〈一八二九〉）の歌が巻頭に掲げられる。この年定信は老中首座に昇進している。そのほか、将軍家斉の嫡男誕生にかかわる儀式で御箆刀（ごへいとう）役を務めた記念の『むらたけ』（寛政四年〈一七九二〉）一冊と日野家への和歌入門記念の『はしだて』（寛政五年〈一七九三〉）一冊である。いずれも幸弘治世のめでたさを象徴するものといえる。

③の算賀集は、『にひ杖』一冊（四〇歳）、『わかみとり』一冊（五〇歳）、『千とせの寿詞』二冊（六〇歳・七〇歳）で、正室をはじめとする親族、大名、旗本、藩士とその縁者等が寄せた和歌、俳諧、漢詩を収める。『わかみとり』及び『千とせの寿詞』には付本として記念の贈答品目録も備わる。真田家の交遊関係の推移を知ることができる。

④の「詠草」のうち遊歌の添削資料は年代ごとに整理されているものと、年代未詳のものとがある。

年代がわかっているものには、遊歌によると思われる添削の朱入れがある。遊歌が幸弘の詠草に加点・添削したものを後にまとめたものであろう。寛政三年（一七九一）から寛政六年（一七九五）までの一二冊と、寛政七年（一七九六）から寛政一一年（一七九八）までの一〇冊に二分割され帙に納められる。詳細な内容調査は今後の課題であるが、ことばの使い方や歌の内容、漢字表記にいたるまで細かな添削が行われ、点取和歌での得点が記されたものが多く、幸弘の歌道修練のようすをうかがうことができる。日野資枝への入門が寛政五年（一七九四）であるから、入門を前に遊歌に和歌指導をしてもらい、入門後もそれが続いていたことがわかる。中には日野資枝の元に送ったという付箋が貼られているものもある。今回もっとも早い時期、寛政三年〈一七九一〉の第一冊を翻刻した。

詠草類のうち年代未詳のものは、『花洛（みやこ）の草結』（三冊）及び『和歌詠草』（一冊）と題して長点がかけられた類題和歌集である。詳細については今後さらなる調査が必要だが、遊歌の添削資料の中から抽出されたものも含まれる。

⑤は幸弘が一〇年かけて幕府に願い出てようやく許可された文化九年（一八一二）の鎌倉・箱根への旅を記したものである。あらかじめ幕府へ提出した旅程表にはないがかねてよりの強い願いで西行の鴫立庵を訪問したということも書かれている。画巻は真景画と和歌・俳諧からなるが、幸弘自身が筆をとったものとお抱え絵師小野正應・書家蓑田牛山に清書させたものとが真田宝物館に伝来する。

⑥は幸弘没後、側近・岩下左源太（宝暦五年〈一七五五〉―天保六年〈一八三五〉、雅号・清酒（きよき））によって編集・筆録されたものである。中本二冊の写本で、題・題簽ともないが、跋文があり、遺稿和歌集であることがわかる。跋文には「文化一三年卯月」の日付があり、「清酒謹言」と書かれる。幸弘は文化一二年（一八一五）八月に亡くなった。上巻は寛政七年（一七九五）から文化元年（一八〇四）までの一〇年間二四三首、下巻は文化二年（一八〇五）から同一二（一八一五）年亡くなる直前までの一一年間二六二首、併せて二二年間五〇五首を収める。幸弘は寛政十年（一七九八）に致仕しているから、四六年に及ぶ幸弘の長い治世の最後の頃から亡くなる直前までの歌集である。遊歌による添削指導を受けはじめて四年経ったころからの歌が収載される。

左源太は、俳号を花足（かそく）、太阜（たいふ）といい、そのほかに象山窟、双鶴庵の号を持つ。幸弘没後、七代幸専、八代幸貫にも仕えた。天明八年（一七八八）に幸弘の近習になったとき三三歳、幸弘は四八歳だった。以来三〇年間幸弘に仕えた側近だった。花足、太阜の俳号で幸弘の点取俳諧に頻

繁に一座してもいる（点取俳諧集『菊の分根』『菊畠』に頻出）。幸弘晩年の鎌倉・箱根への旅にも同道、吟行している。幸弘の側近中の側近であったと思われる。彼は、領内での教育活動にも積極的で、天明期から文政期まで城下で和歌・国学を講ずる私塾・双鶴堂を開いていた。松代百人一首『松の百枝』を編集してもいる。

朱入りの添削詠草資料は藩主の歌作りの実態を示す資料として貴重である。それらは屋敷の中で自室に籠ってひとり歌作に励む勤勉な藩主の姿を伝える。また、歌の師である遊歌や日野資枝に対する真摯な学びの態度を示してもいる。一方、遺稿集に収められた歌は、特定の場所で詠まれたものや、特定の人に対して詠まれたものである。公的な和歌活動の足跡といえる。

これら真田宝物館伝来の和歌資料のほかに、国文学研究資料館に寄託された真田家文書には、「幸弘公御自詠岡部衛士賀茂真淵点」、「和歌入門誓詞案」（「寛政五癸丑年五月／日野家門入誓詞中書」の上書あり）、歌集『菊筵』がある。

また、真田宝物館と国文学研究資料館には歌をしたためた短冊も数千枚伝来する。賀集に寄せられた歌の一部は短冊帖として美しく装丁されている。

遊歌について

遊歌の生没年等詳細な来歴は不明だが、真田宝物館には、遊歌の足跡が多く残されている。前節で紹介した遊歌宛の資枝書状は、資枝が点をかけた幸弘の和歌懐紙とともに大切に保存されている。また、前節で述べたように、遊歌は、安永八年（一七七九）幸弘四十歳の算賀集『むら丈』に和歌、天明七年（一七八七）正月に松代の海津城に番の鶴が飛来して七日間滞在した吉祥を祝う歌集『ともづる』に巻頭の祝詞、寛政三年（一七九一）竹千代御箆刀役祝賀和歌集『むら丈』、寛政四年（一七九二）資枝入門祝賀和歌集『はしだて』に和歌を寄せている。

幸弘四十の賀の到来覚『むら竹の山彦』には「松鶴御祝詩歌俳諧名籍集」の筆頭に「遊歌」が書かれ、その下に「浅草境内御出入」と付記される。

幸弘五十の賀のときの『御年賀御祝儀一許』には「御杖／御賀詠草献上　冷泉家様御門葉遊歌女」とある。真田宝物館には遊歌が幸弘に贈った杖一本と杖袋二袋が伝来する。杖袋には遊歌の祝歌「手にとりて君そかそへむこの杖にいまよりこもる千世のよはいを」が刺繍されているが、「杖袋の歌　遊歌上」と書かれた和歌懐紙も伝来する。一組の杖と杖袋は幸弘六十の賀のときのものであることが六十歳の算賀集『御ことほきの記』の記述からわかる。もう一つの杖袋には「するなかくつたふる家につく杖はゆくゆく千代のさかへをもみむ」という遊歌筆の和歌が書かれる。杖は伝わらない。もしかすると五十歳のときに贈られたものかもしれない。

これらの資料から、幸弘と遊歌の交遊は、二十年以上の長きにわたるものであることがわかる。そして、「浅草御出入」の「冷泉家様御門葉」つまり、江戸の冷泉家門人であったことが明らかである。

大谷俊太氏が翻刻・紹介した真田宝物館に伝来する遊歌宛資枝書状（「真田幸弘と和歌」前掲井上科研・研究成果報告書）には、「真田右京大夫殿和哥御相談の事、領事いたし候処、細〳〵との御文給ことにもくろくの通り恵み給、御ねん入候御事、幾久しく御いわゐ申入まいらせ候」とある。和歌入門に際しての幸弘の献上品への御礼が述べられている。そして「詠哥一体教訓等送りまいらせ候」とあり、入門を認めて、「詠哥一体」と「教訓」（烏丸光栄「和歌教訓十五箇条」か）を託している。あくまでも遊歌を介してのやりとりであることが特徴的である。

ところで、岩下左源太と同じように幸弘の側近であり、また、幸専・幸貫三代に仕えた鎌原桐山の随筆『朝陽館漫筆』には、桐山（安永三年一七七四）～嘉永五一八五二）は、学問を好み、菊池南陽・岡野石城らに学び、自らも私塾朝陽館で教え、和歌・漢詩をよくした。『朝陽館漫筆』には、和歌や漢詩に関する記事も多く、日野資枝の歌にまつわる事蹟や松平定信が折々に詠んだ歌なども書き留められている。

辛未（文化八年一八一一）の年号が書かれている巻之廿八には「東都の歌よみ遊歌女」が一晩で吟詠した春と秋の季題を番にして優劣を問う和歌十五首を転載する。（引用は北信郷土叢書第八巻所収『朝陽館漫筆』北信郷土叢書刊行会、昭和一〇年四月所収の本文による）。

東都の歌よみ遊歌女

いにしへ業原朝臣小野小町に問給ひしとやらん春の朝と秋の夕く　れをはじめかず／＼番ひていつれかまさると尋給ふ。何とおもひわきてこたふべきならねど、つたなき心にもいさゝかひくまをかい付ハベルはおこなりともおもひ玉ふらん、つゝましながらうとき人のみんにもあらず。秋の夜のながきつれ／＼のすさみなれば此まゝやりすて給へとてなん。

春の朝と秋の夕暮

うち霞む木のめも春のあしたよりくさは露そふ秋の夕ぐれ。

鶯と郭公と

鶯の簷に来て鳴初音よりももらす枕の山ほとゝぎす。

花の夕に月のうつると秋の月の尾花を照らすと

秋の夜の尾花をてらすそれよりも花に匂へる夕月のかけ・

これは御伽草子『四十二の物あらそひ』に基づく『小町業平歌問答』（吉海直人「新出『小町業平歌問答』二点の紹介と翻刻」同志社女子大学日本語日本文学）第18号、平成一八年六月）をまねて遊歌が秋の夜長に「物あらそひ」の題をたてて歌を詠んだものである。以下、「牡丹と菊と」「藤と杜若と」「ひばりと雁と」と続く。そして、季題を離れて様々な情況での対比の題に変化する。「暑さの強きに風のいと涼しく吹入ると寒さの堪かたき日の出てあたゝかなると」「雨のつゝきて日の出るを待と日の照り続て雨を乞ふと」「にくき人の情けふかきとおもふ人のつれなき」。さらに、歴史上の人物の「物あらそひ」が続く。再び引用してみよう。

定家卿の心高きと実隆公の戦中もいとはず敷島の道をならし給ふ心広さと

木高きも何にくらべん小倉山よゝ吹つたふ峰のまつ風。

寂蓮法師と西行法師と

わかれすよその色となき槇の葉も鴫立沢も同じ夕暮。

吉田兼好と宗祇法師と

徒然に世をそむくよりにゐはりに筑波に高き名ぞ残りける。

清少納言と紫式部と

巻あけしこしの外山の雪よりも石山寺の秋の夜の月。

機智に富んだ歌が並んでいる。一晩の遊びでこれを詠んだことを伝えられた人が面白く思って書き留めたのを、桐山も興味深く思って書きとめたのだろう。

『朝陽館漫筆』記事の記載年月は必ずしも巻の編集年とは限らず、記載順も時系列にしたがってはいないようだ。右の遊歌の記事の直前には、寛政六年（一七九四）二月十六日に「鎮目軍記勝

勇」なる「奥支配方」を通じて「上々様方」より幸弘正室三代姫（真松院・白河藩初代藩主松平定賢娘）に「御自筆御短冊」が下されたとして、短冊の歌を記している。また、その直後には、次のような記事が載る。

花落て実をむすび木のめきざして古葉おつ。花こそちらめとかやいひけん、もとの根さしのさかふれば、花も木の葉も落るにこそ、まして仙人の汲てふ菊の下水ふかきよろこびはまし侍らめや。ことなき方よりほのこころゑ給ふことの侍れば、おほけなくもことふきなるとて

さはかりと思はぬ菊の下水も落て千とせの淵とこそなれ。

右は柳営にて蓮の飯の向ふに付候さし鮭とやらん御給仕の仕落にや、御畳に落けるとなん、是を御台様深く御心に懸させられしを、御老女の内遊歌に学べる方の内々同人へ御咄被成候付、人しれず読てさゝけしとかや。遊歌は柳営へも出候よし。これは女中かたの御学び成候故なるべし。

其御局なるにや睦月のはしめ祝の膳のはし取落しぬるとて、深ふ心いたませ給ひ、遊歌にも咄ありけれけば取初るはしも折得て悦の数またるべきあら玉の春。

右遊歌詠の数々寛政五丑の年八月金井清次ぬしよりおくり給へる

大奥に仕える女中たちが御台所の御前で給仕をしていて鮭や箸を取りこぼす粗相があったときに、その話を聞き及んだ遊歌が、粗相を慶事に転化する寿ぎの歌を詠んだことを伝えるエピソードである。ここからも機智に富んだ遊歌の柔軟な態度と、そのようなハプニングがあったときに奥女中たちから相談を持ちかけられるだけの存在感ある人物であったこともわかる。「御老女の内遊歌に学べる方」が遊歌に相談したとあるから、冷泉家門人として奥向きの女中たちの和歌指導をしていた女性だといえる。このことを金井清次こと岩下左源太から聞いたのが寛政五年（一七九四）のことで、記事のなかに「遊歌は柳営へも出候よし」とある。ちょうど幸弘が資枝入門を果した年である。かつての遊歌の事蹟や詠草を書き留めたものがあり、それを読んだ左源太が書き留めて桐山に知らせ、桐山がここに転記したもののようだ。

以上の『朝陽館随筆』の記事から、遊歌が江戸在住の柳営女流歌人であり、冷泉家門人として、直接日野資枝と書状をやりとりできる立場の人物であったこと、大奥に仕える老女たちの和歌指導者でもあり、相談役でもあったことがわかる。

＊柴桂子氏は、尾張国名古屋の寺島恒固（つねもと）『梅処漫筆（ばいしょ）』に掲載される「月五十首詠哥」の作者「遊歌」を、この遊歌と同一人物ではないかと類推する。「江戸浅草馬町ニ住ス　モト尾張侯ノ老女ヲ勤メ後　致仕シテ浅草ニスミ手習ヒト　和歌ヲ師範セシ」という添書きと、前に書いた『むら竹の山彦』「浅草境内御出入」の記事と「浅草馬町」を結び付けてのことであろうが、浅草境内すなわち浅草寺と、浅草馬町は別の場所である。また、遊歌が尾張家の転陵院に仕えていたのではないか、そして、転陵院が安永七年（一七七八）に没してから江戸に下り、宗武の次男である定信の紹介で真田家に出入りするようになったのではないかとするが、そうではないだろう。ところで、和歌詠草第二冊の最終丁には次のような幸弘と遊歌とのやりとりがある。遊歌記述部分（斜体）は朱筆である。

ゆか女におくる

吹送る風のたつきを言の葉に咲そふ花の匂ひまつらし

↓（添削後）吹送る風のたつきを言の葉に咲そふ花の匂ひをそまつ

ゆか上

心なき風にたくへて言の葉のはなの色香のあせなんはおしと

かりこまり入候

第二冊は、第一冊と同じく題簽に寛政三年（一七七一）とある。遊歌に歌の指導を受けるようになった幸弘が、遊歌とのやりとりに感謝と喜びをこめて歌を詠んだのだろう。自分が送った詠草を遊歌が添削して歌の姿が改まることを花が咲くさまにたとえて、添削の返送を心待ちにしているという歌である。その歌自体の「まつらし」が「をぞまつ」に添削されているところがほほえましい。推量表現ではなく係結びをつかった強調表現に改めて、遊歌の返書を待つ気持ちを強めている。遊歌が幸弘の思いに即して丁寧に添削していることの表れである。幸弘が自分の詠草を「吹き送る風」になぞらえているのを受けて、遊歌は自分の返書を「心なき風」といい、幸弘の歌の言葉を「花の色香」にたとえ直している。遊歌もまた敬意と親愛の情をこめて返歌を詠んだのである。幸弘の遊び心に遊び心で答える遊歌の態度は、『朝陽館随筆』に書かれた失敗して気落ちしている老女を歌で慰める遊歌のおおどかなやさしさと通じ合うものだろう。藩主としてあるいは大名俳人としてはベテランでありながら、歌道に関してはまったくの初心者の幸弘が、素直に、そしてたのしげに遊歌に指導を請うているようすが伝わる。

今後さらに調査を進め、遊歌の実像をより詳しく探りながら、幸弘の和歌活動の実態を追究していきたい。

（文責・平林）

付・翻刻　『詠草　一　寛政三年』

［書誌］

写本一冊。縦一九・九糎×横一五・一糎。表紙　地紋判別不能　山吹色。題簽「詠草　寛政三年　一」（左上）。楮紙。二四丁。

整理番号　文書の部第四―二―一号―一。

［凡例］

一、和歌は三行書きだが、翻刻では一行書きとした。

一、詞書は二字下げとした。

一、旧字及び異体字等は適宜通行の字体に改めた。

一、文字の清濁は原文通りとした。

一、判読不能な文字は〻とした。

一、全ての句の右肩に長点が付いているが、翻刻の際は略した。

一、丁の終わりの文字のあとに〈|〉を付けた。

一、遊歌添削部分については朱書きの書入れに傍線を付し、一首に仕立て直して別行に一字下げのうえ書き改めた。

一、割注になっている箇所には、〈／〉を付け、一字下げとした。

［翻刻］

早春霞

あけそめてかはらぬ春や久かたのそらにかすみのまつ匂ふらん

あけそめてかはらぬ春や久かたのそらもみとりにかむのとけさ

ふるとしの雪もけなくにあけそめてかすみひとへに○はるやたつらん

ふるとしの雪けのそらもわかみとりかすみとゝもにはるやたつらん

／○あし候

／雪もけなくにとは春もちと日数／たつる様に聞え候春たつるは／またけなくにといふそらは／まいらすきのふのまゝ也

棹姫のかすみのころもたちそめていくえの春やかさね来ぬらん
　棹姫のかすみのころもたちそめてそらもみとりの春は来にけり

庭梅

立かつるはるをもしらぬ」山さとのかせにおとろく庭の梅か香
　立かつるはるをもしらぬ山さとの庭にいつしかにほふ梅か香
春たちし日かすや園にしられけむ軒もかきねも梅のした風
　春きての日かすも園にしられけりのとかににほふ梅のした風
／春たちし日数とは春きての日数に候へともちとみえしと／申せはきてといふ様にきこえかね候しられけむ園けんとみた／かへは園か春をしりたるかといふ也園は心なきものゆえいかゝ也梅の梢／ならはよし園に梅の咲たるにて人か春の日数をしりたるかたよろしかるへし
人とはぬやとさへかせのたつきよりたか袖ふれて庭のむめか香
　よもきふのやとさにもせのさそひ来てとはるゝ庭の花のむめか香
／閑居の事をよもきふの宿／あさちふのやとなとゝ申し／四五の句つゝきおもわれ候

柳露

しら露の玉の緒なかく青柳にくる春ことや」みとりそゆらん
／此御詠御よろしく候
しらつゆも朝な〳〵にそめかへてみとりをそふる青柳のいと
　しらつゆも朝な〳〵にそめそへてみとりふかむる青柳のいと
／そめかへていかゝ也あさな〳〵
／いろ〳〵にそめる事あるましく候
春風にとけてみたる○ゝ青柳のいとより露のたまそちりける○
　春風のふくにまかせて青柳のいとより露のたまそみたるゝ
／○あし候

夕帰雁

春の日に何いそくらん夕こえてかすみかくれにかへる雁かね
　なかき日に何いそくらんくれふかきかすみをわけてかへる雁かね
時しるやはなの夕越」立わかれうしろめたくも帰るかりかね
　咲はなの朝の夕立わかれうしろめたくも帰るかりかね

雨後花

雨はれてなかむる遠の尾山まて花のさかりの色そことなる
　雨はれてなかむる遠の山のはに花のさかりの色そことなる
咲しより雨のあしたはことさらに色もはえある花のひともと
　咲そひて雨のなこりにはいととなを色もはえある花のひともと

春神祇

いく春も濁らぬ御代にすみよしの神と君との」すえ久しけれ
　いく春も濁らぬ御代にすみよしの神の宮居そいとゝのとけき
春くれはなを色ましてさかき葉の葉毎に神のめくみとそしる
　春くれはなを色ましてさかき葉のみとりに神のめくみとそしる
いそのかみふるきむかしのあとたれていく春栄ふ和歌の神垣
　いまも猶つきぬめくみのあとたれていく春栄ふ和歌の神垣

苗代

せき入る岩間の水もはる風に花の浪よる小田の苗しろ
　せき入しなはしろ水もはる風にさゝ浪よする小田ののとけさ
うちかへしねかふ山田の」なはしろにする袖もゆたけき秋そまちぬる
　うちかへしまつる山田のなはしろにゆたけき秋やかねてまつらん
うちかへし水せきいれて小山田のひくしめ縄にいはふ苗代

すきかへし水せきいれて小山田のひくしめ縄にいはふ苗代
賤の男かたねまきそめてはる雨のそらにまかせる小田の苗しろ
賤の男かたねまくころのはる雨に水ゆたかなる小田の苗しろ
山小田の水せきわけて千さとまてしめ引はえていはふ苗代
小山田に水せきわけていく千町みしめ引はえいはふ苗代

松藤」

常盤なる松にかゝれるふち浪をいく春ことの盛み来らん
常盤なる松のてすゑのふち浪やいく春ことに盛み来らん
池水にうつろふかけや末の松さく藤なみのこえぬひまなき
なれまつる春もいつしか末の松さく藤なみのこえぬひまなき
ちきりをけ十かへる花のまつかねにけふ咲かゝる藤のさかりを
十かへりの花をもかねてまつかねにけふ咲かゝるやとの藤なみ
ときはなる汀のまつもかけふかくちひろのそこに咲る藤波」
まきかけし汀のまつのかけふかくちひろのそこにみゆる藤波

恨恋

うき事をおもひかさねて小夜ころもうらみてのみやひとりぬるらん
うき事をおもひかさぬる小夜ころもうらみてのみやひとりねなまし
世をうらみ身をかこちつゝとし月をあたにくらしていつかはつへき
うらみのみ中にかさねてとし月をあたにくらせる身こそはかなき
うきことをおもひかへせはことの葉も今はうらみむたねとみるらし
うしやひと色かはりゆくことの葉の今はうらみのたねとなりぬる

新樹

山の井にうつる梢も」日にそへて水をみとりの色やまつ覧
しけりそふ木ゝのわか葉にかけうつる水をみとりの色やまつ覧
／新樹の意かし
山かつのあれたきすゝのやとなからしけるわか葉に雨ももらしな
山かつのあるゝのきはも夏木立しけきわか葉に雨はもらしな
名にめてゝみとりやいとゝしけむらん青ねかみねもわかはする頃
名にめてゝみとりやいとゝしけるらん青ねかみねの木ゝのわかはは
／御詠よろしく候てには／はかりのかる也

卯花

卯の花のさける○垣根はいとゝなをもる○月かけもさやけからまし」
卯花のさける垣根はいとゝなをうつろふ月もさやけからまし
／のに及す
籬には○雲かとそみるうの花のくるれは○月とあやまたれけれり
白雲のおもかけみせしうの花やくるれは月とあやまたれけれり
／同字耳にたち／よろしからす
／くもれは月となれは／昼の内は雪とみゆへし／まかきにもありては聞えかたし候
雪とみしよし野ゝ里も春過てかきねつゝきにさける卯の花
しらなみのうちよするとや見ゆるらん籬かしまにさけるうのはな
しらなみのうちよするとやまかふらん籬かしまにさけるうのはな
／此句まかふとあるかたすなほなり／るもしも耳にたつ也

窓竹

雨になをみとりもふかく色まして幾世ふるらん」窓のくれ竹
／よろしくとゝのひ／こそ候
「いく千世も遠せぬ「まとの「くれたけを我起ふしの友と頼まむ
まとの前にいく世遠せぬくれたけを我起ふしの友と頼まむ
／遠せぬ窓といふつゝき／いかゝと申候

／此御詠一〳〵は御よろし候

いかてかは○月さへとはぬ雨の夜に窓うつ竹のおともあらねは
淋しきは月かけもらぬ雨の夜に窓うちあかす竹のした風
／○あし候

待蜀魂

ほとゝきすまつにかいなき雨の秋に窓うつ竹の音のみそして
　ほとゝきすまたふりいてぬ秋なくに窓うつ雨の音つれそうき
言葉して過る日かすの」そらにまつかひもあらしのやまほとゝきす

早苗

うへしより千町の水に影みえて早苗すゝしく風わたるなり
　小山田の千町の水に影みえて早苗すゝしく風わたるなり
賤の女の袖ふりはえてさみたれにむれつゝ小田の早苗とるなり
　賤の女が袖ふりはえてさみたれにむれつゝ小田の早苗とるなり

寄草恋

わすらるゝ身はまかなくに恋くせやおもひのたねの」つくる日そなき
　わすらるゝ身もいつまてか恋くせやおもひのたねのつくる日そなき
なか〳〵に夢わすれしな夏竹の葉するゑにむすふふかき契りは
　かけてなを夢わすれしな夏竹の葉するゑにむすふふかき契りは
／初句よます

聞郭公

ほとゝきすきゝしより猶忍はれていま一こえをまたれやはせぬ
　ほとゝきすきゝしより猶忍はれていま一こえとまたや侍らん
晴かての雨のあしたのくもまより山ほとゝきす夢のみそする
　晴かての雨のあしたのくもまより山ほとゝきすふりいてゝ鳴
うきひとに身を習はせの」ほとゝきす鳴あかしつゝ世を忍ふらん
　うき恋に身を習はせのほとゝきす鳴あかしつゝ世を忍ふらん

皐月雨

かきくらしむろのやしまも五月雨に雲のけふりや空にたつ草
　かきくらしむろのやしまの五月雨は雲のけふりや空にたつ草

瞿麦

床夏のめかれぬはなのいろ〳〵に庭もにしきをしくかとそみる
うち拂ふちりにはあらて床夏の花にをきそふ」露のかす〳〵
おひたちしつゆの恵みの色そひて妹の垣根に咲し撫子
　おひたちしつゆの恵みの色そひて妹の垣根に咲る撫子
／前句御よろしく候

蚊遣火

山もとにゆふへのころもうち返し軒端いふせくかやりくゆらす
　山もとにゆふへのころもうち返し軒端いふせくくゆるかやり火
いふせさのけふりはきえて夏の夜のまくらに近くきほふ蚊のこえ
　立そへしけふりはうすくふくる夜の手まくら近みきほふ蚊のこえ
もしほたくけふりは絶て」浦人のよひ〳〵ことにくゆる蚊やり火
　もしほたくけふりにそへて浦人のよひ〳〵ことにくゆる蚊やり火

寄河恋

なみた河そてのしからみかけてしもふかき思ひにせしかたそなき
　なみた河そてのしからみかけてしもふかき思ひはせしかたそなき
／御よろしく候

中〳〵に人はしらしなあすか川つゝむなみたの渕となるとも
　うき中に人はしらしな思ひ川つゝむなみたの渕となるとも
忘れなとよしやあふ瀬も中河のたえぬなかれのすゑのちきりを」
　忘れしとあふ瀬もふかき中河にたえぬなかれのすゑのちきりを
わすれしなよる瀬はいつとわかねともうき中川のすゑの契りを
　たのむそよよる瀬はいつとわかねともうき中川のすゑの契りを
来しかたのちきりやふかきおもひ河たらぬあふ瀬の末もたのまむ

寄海恋

あた人もかくとはしらしわたつみのちひろの底の深きこゝろを
　あた人のかくとはしらしわたつみのちひろの底の深きおもひを

夏月

秋ならてさやけき影や」したひみんさはる木間も夏夜の月
　秋ならてさやけき影はなつのよにさはる木すへもなかそらの月
／さはる木もなきは中空の月なるへし／夏は木立茂れは出入月には／さはりかち也

新秋露

おとろかすかせのひと葉もまたきよりまつ散初る浅茅生の夢
めつらしく露をきそふる萩の葉をたつ秋風のふきなちらしそ
秋たちてまたきはつかの草の葉にはやをきそふる露もめつらし」
　秋たちてまたはなもみぬもゝ草にはやをきそふる露はめつらし

旅行友

いつしかと日数かさぬるたひころもきつゝかたらふともそしたしき
　たち出し日数かさねてたひころもきつゝかたらふともそしたしき
ふみ分てくるれはむすふ草まくらゆめもたひ寝のともとこそみれ
　ふみ分てくるれはやとも草まくらともにたひ寝の夢もむすはん
ゆきつれてうきはかはらぬ旅ころもうらなくかたる友そ頼もし
　ゆきつれておなしうきねの旅ころもうらなくかたる友は頼もし
おもふともかたりあふてはおのつから旅のならひの」うきや忘れむ
　おもふともかたりあひてはをのつから旅のならひのうきや忘れむ
／御よろしく候
鳴つれて空ゆく雁もしたはましおなし旅路の友とおもへは

萩

みるひとのこと葉の露に道ふかくあさ茅の萩の盛そゆらし

庭槿

朝顔とおなし籬にさきかえてみるたひ毎の花もめつらし」
朝かほは日陰もまたすさきいてゝつゆの籬に花の数そふ
　朝かほは日影をまたすさきいてゝつゆの籬に花も数そふ

きぬた

我のみかおなし夜空のころもきてたか里まても砧うつ覧
　我のみかおなし夜空のからころもたか里まてもうちしきる覧

山月

秋かせの雲ゆき拂ふ山の端にひかりさやけく出る月影」
　秋かせの雲ゆき拂ふ山端にひかりさやけく出る月影
／のに不及
／御よろしく候
／山端すへてかやうの字のに／不及／梅の花　木の本　天の川　此たくひ也

河月

大井河あらしの山の雪かともふけゆく月にしら波のたつ

大井河あらしの山にふる雪の俤うかふ月のしら波

女郎花

あたし野ゝあたにたつ名の女郎花おもはぬかせになひきこそすれ

うちみたれあたにたつ名の女郎花おもはぬかせになひくすかたは

／化し野いまはしき／ゆへまつよまきぬ事に／いたし候

／無常追悼なとには／よみ候

夕虫

やゝ寒み秋もする〻野ゝゆふくれや色かれ〳〵にむしの鳴らん」

やゝ寒み秋もする〻野ゝゆふくれに色かれ〳〵のむしや鳴らん

鹿

つまこふるおのかなみたのつゆふかく草ふみ分て庭や鳴くらん

つまこふるをのかなみたのつゆふかき草ふみ分て庭や鳴くらん

名月

さらしなの秋のこよひと名にめてゝちりそふ月の影そさやけき

／ことに句よろしく候／ゆか上

／さらしなの名にあふ月のさやけさも／ちらすことはの露こそみれ／ゆきてみぬうらみも／はれ〳〵と拝読奉り候

菊

うつし植てちとせも爰に咲にほへ山路のきくの」ふかき根さしは

咲そひて千代をかさぬるしら菊や老せぬ花の色にみゆらん

千ゝの秋なせともなはんこのやとの遠せぬ菊の花のさかりは

十三夜

またたくひなかはも過て長月のかけやもみちにちりまさるらむ」

／御よろしく候

（文責・竹中）